

新刊紹介

Basil Willey: *Christianity— Past and Present*

文明は部分的に輸出することは出来ない。というのがトインビーの歴史観の主要なテーゼの一つである。そして文明の中核が宗教であるという考えがその根柢に潜んでいるのである。彼によれば十六世紀に初まる西欧人の大洋航海によつて、彼等は先ずその文明を中核たるキリスト教を中心として所謂「後進国」に輸出しようと試みた。然しこれが失敗に終つたことを悟るや、彼等はこの中核をぬき去つた科学技術文明のみの輸出に力を注ぎ、「後進国」の欧化主義者の歓迎をうけたのである。然し彼の指摘しているように、宗教的中核をもたぬ技術文明は原子核を離れたエレクトロンの生ぜしめる連鎖反応の如き致命的な破壊力をもっている。西欧文明自からの世俗化と並行して、否一層加速度的に、「後進国」の伝統が技術文明に破壊され、渾頓と不安の状態に陥つた大きな原因の一つがここにあつたことは、今日ではもはや常識となつた見方であろう。現代のわが国がその例に洩れぬことは申すまでもない。そしてこの状態からわが国を救出する原理として、知識階級によつて表面上最も有力に主張されているものは、云うまでもなくマルクシズムであるが、その

反面、強かな声としては現われないながらもマルクシズムに対する危惧と反撥も、根強くわが国の知識人によつて懷かれていたのではないかと思われる。抑々彼等インテリの教養は西欧のそれであり、西欧の思想界や社会の状態が彼等にとつてはただに他山の石たるに止まらぬ筈である。事実フランスのレジスタンスは先端的インテリが猫もしやくしも謳歌渴仰するところである。ところが西欧におけるキリスト教思想の現状とか、東独から失業を覚悟で西ベルリン地区に多数の難民が逃げこむといつた社会状態等は、少くともジャーナリズムにおいては無視されているに近い。ところでこの辺から少しづつ英文学の領域に話をもち込むとするならば、三十年代の青年作家によつて試みられたマルクシズムとフロイドによる救済策が何等見るべき成果を生まなかつたことは認められねばならないであろう。勿論この両者が、英国社会に何等の貢献する所がなかつたとか、跡形もなく消失したと云うのではない。然し今日の不安と絶望をとく鍵としての役割は、この二者に委ねられていないことは確かであらう。(英国の社会主義はマルクシズムそのものではないと筆者は考えている。筆者浅学菲才の上に怠慢と来ているので、或いは見当違いかも知れないが、どうもそうとしか思えない。これに反してキリスト教は日々その力を失い乍らも、未だに余命を保ち、エリオット、ウォー、グリーン等の作家の中に生きた力として働いてい

るのである。われわれとしてこの点を無視することは重大な怠慢と云わねばならない。

然し此処で問題となつて来るのは、伝統の問題であろう。西歐文明を科学主義と世俗化に由来する崩壊から救わんが為に主張されているキリスト教の伝統やカトリシズムは、所詮われわれの伝統ではない。エリオットの説く伝統主義や文化論に共鳴すればする程、われわれ極東文明の端につらなる異教の末裔にとつては、それがわれわれをしてキリスト教に身を投ずることを妨げるというパラドックスを生ずるのである。と言つて今日のわれわれは、極東文明の伝統に立ちかえることが出来ないとするれば、われら如何になすべきであろうか。バジル・ワイレーの近著 *Christianity: Past and Present*. (Cambridge University Press, 1952) は、この点に関して一つの手掛りを与えてくれるものと思われる。以下にその理由を挙げてみよう。

その前に一寸蛇足を加えさせて戴きたい。著者がケンブリッジ大学の英文学教授でありその三部作とも言うべき「十七世紀の背景」「十八世紀の背景」及び「十九世紀研究」が近世英国思想史の優れた解説であることは周知のことであるが、この「キリスト教——過去と現在」は一寸毛色が変わっている。元來文明思潮史を得意とする著者が宗教の分野に足をふみ入れることはことさら異とするにたら

ぬであろうが、本書は初めケンブリッジ大学神学部教授会の依頼で行われた公開講義であつたために、場所柄、著者は大分気がひけたらしい。畑違いの学問についてその道の専門家の前で語ることは、

誰しも気おくれを感じることであろう。ワイレーをして敢えてこの冒険を試みしめたのは、キリスト教の国境近くに住み、出来るならば国境線を越えてキリストの国に入りたいと憧れている多くの近代人の声を代表するという点に、彼が彼なりの「クレド」を表明する資格があるであらうという考慮からであつた。彼自身が何らかの教会に属する確固たる信者でないのみならず、正統的キリスト教徒の友人たちから、その思想の非キリスト教的な二三の点を指摘されたことがあるという事実も卒直に告白されている。われわれにとつて有難いのはまさにこの点である。成程彼自身はやせても枯れても尙キリスト教の伝統に立つ社会に属してはいるが、その伝統が昔日の面影を止めぬ点においては、「後進国」の伝統の衰微と程度の差しかないとも考えられよう。著者は彼自からの「クレド」を闡明するに当つて、キリスト教をその源にまで遡り、簡單乍らキリスト教思想の発端とその変遷、そしてそれ等を貫く一筋の核心的な本質を、歴史的にあとづける必要を感じた。読者は彼と共に感じ、彼と共に考えつつ、西歐二千年の宗教思想の伝統の大観を会得することが出来る。公開講義の性質上、この大仕事が平易に理解されるようにな

されていることはわれわれにとつて更に有難いことである。

前置きが長くなつたが次に簡単にその内容を紹介しておこう。恐らく七回になされた講義が、殆ど語られたまま収録されて七章をなしている。第一章の序論で彼自からの立場と全体の概観を述べた後、原始キリスト教時代についての次章では、ギリシア哲学の下から上への運動に対するキリスト教の上から下へ、神から人間への働き等について語り、第三章「信仰の時代」においては、中世のスコラ哲学とその主要な学者、及び附説として実念論と唯名論について述べる。キリスト教的神秘思想とヒューマニズムを論じた第四章から、著者の得意とする十七世紀以後の思想史に入るのであるが、われわれの興味をまた深くなる。ここではヒューマニズムが元来キリスト教の産物であつたということ、近代科学の始祖たちの意図が、本来は全くキリスト教の擁護にあつた点等が説かれている。然るにベイコンやニュートンの斯るキリスト教的意図が十八世紀の「自然」を中心課題とする理神論の時代に入るや、科学は漸く宗教から離反せんとする本性を現わすに至る経緯が第五章にのべられている。次は十九世紀の所謂「誠実な懐疑」^{オースト・ヤク}についての一章で、不可知論者の代表としてハクスレーとレズリ・ステイヴンが論じられた後にいよいよ最後の現代を論じた第七章に入る。この章が実に本書の生命であり、われわれにとつても興味の中心をなすのであるが、筆者としてはと

てもその論旨を要約することは出来ない。只ごく表面的に次の諸点だけを指摘しておきたい。ウイレーによれば、今日のキリスト教はもはや科学との間に衝突をおこすようなものもつていない。近世に入つて科学の攻撃の矢面に立つたキリスト教は、本来宗教の領域に属するものではないにも拘らず、宗教の実体乃至はその一部と考えられていた附随物を次々とはぎとられ、専ら守勢に立つていたのである。然るに今日では宗教はもはや科学の攻撃に対して安全であるのみならず、守勢から転じて攻勢に移つた。この様な境位にキリスト教をもたらした思想家として、彼はコウルリッジとキエルゲゴールの二人をあげる。この二人の力によつて、キリスト教は今日教義の問題から人間存在の問題として取上げられるに至つた。この点が実に本書の核心をなす見解であつて、そこには多くの問題があり、ウイレー自身もまた問題の余地を認めている。然し彼の主張が甚だ謙讓なものであることは、彼の論旨の力をそぐものではない。それは問題がウイレーという一人の人間の存在^{エグゼシツン}の領域に持ちこまれているからである。多くの批判の余地を謙讓に認めながらも、彼の立場が揺ぎのないものであろうことは理解されるのである。彼にとつては「クリスチャン」となるには何を信ぜねばならないかということではなくて「如何にして自分はクリスチャンになれるか」ということが問題となる。自己自身を知り、罪を悔い、同胞を愛して新し

い生活に入るといふことは、キリスト教徒の第一にすぎぬものはあるが絶対に欠くことの出来ぬ一步である。これなくして信仰を論ずることは無意味であり、この点に立帰ることによつてキリスト教は再び原始キリスト教の如く、教義や命題に対する同意からではなく、悔い改めと再生から出発する本来の姿に戻るのである。キリスト教的な生活の全き実践者としてのキリストへの傾倒、キリスト教的実践の強調は、筆者にふと「カラマーズフの兄弟」の中の僧正ゾシマの言葉を思い出させた。只今訳書が手もとにないので確実ではないが、如何にしてクリスチャンとなるべきかという質問に対して、彼はまずキリスト教的行為を実践することをすすめ、信仰は必ずからこれに従うであろうという意味のことを答えていたと思う。

最後にもう一つだけ附加えさせて戴きたい。それはウィレーのこの謂わば「護教論」が、近代科学が現代の不安と渾頓を解決することに失敗したが故に、それ見たことかとキリスト教の効能をのべ立てるが如き安易なものではないということである。近代的科学思想と宗教との相克において、領土を譲つたのは常に宗教の側であつた。宗教はたとえばキエルケゴールにおいては、*Crede quia absurdum* という最後の一线にまで追いつめられたのであるがかえつてそのために、脈々たる生命をもつて蘇つたのであるとウィレーは考へる。今日のキリスト教が、本質的に已に属さなかつたものを他

の領域に委ねたといふことは、信者の心がやせ衰えたことを意味するものではなく、却つて深く豊かに、過去におけるあらゆる人間の精神的労作を取入れ、何物をも失わずに生長して来たことを意味することが、この一巻によつて明らかにされていると思う。ただ最後の二三頁においてわれわれに多少の不安の念が生ずる。ウィレーは宗教が理性を超越したものである点は充分に認めるのであるが、そしてキリスト教の *mystery* は認めることが出来るが *miracle* —— マリアの処女受胎、キリストの復活等 —— をそのまま信ずることを躊躇する。異教徒のわれわれには当然のことと思われもしようが、筆者としては最後に、これが神の国に入る著者の躓きとなることのないように心から祈るばかりである。

—— 川田周雄

C. Day Lewis: *The Poetic Image*.

著者が一九四六年にケンブリッジで行つたクラーク、レクチュアである。六章より成り、イメジの問題について種々の角度より考察し、同時に四世紀にわたる英詩の中より博く引用して具体的に詳細な説明を加へたものであつて、詩的表現の中心をなすイメジの問題に関して詳述した有益にして極めて興味の深い書物である。まず